

戦間期と「国家社会主義者」シラー

トランシルヴァニアのシラー祭Ⅱ

鈴木道男

序

国家社会主義者としてのシラー！

最果ての「ドイツ」の1859年のシラー祭から遠望するNSDAPのシラー生誕175年祭

小ザクセン主義・汎ドイツ主義・国家社会主義

序

前稿（鈴木2018）において、1859年のシラー生誕百年祭及び1905年の没後百年祭という二つのシラー祭が、ドイツ世界の辺境のさらに外にある飛び地であるトランシルヴァニア¹のドイツ人、いわゆるズーベンピュルガー・ザクセンが、他民族に囲まれて少数民族として生活する「ドイツ人」としての統一的な民族意識を堅固なものへと確立してゆく過程において果たした大きな役割を指摘した。「民族」意識の高揚の場としてのシラー祭及び「新聞」²等のメディアがシラー祭の構築に果たした役割の描出については、トルステン・ロッゲの大著（Logge 2014）の指摘に負うところが大きかった。1959年のシラー生誕100年祭において、シラー自身とその各作品というよりは、独り歩きしてゆく「国民詩人」（Nationaldichter）としてのシラー表象のなかに、ドイツ統一を見据えて様々な論客が様々な姿を描いてきたのだが、そのうち教養市民層（彼らの中で、とくに辺境に追放されてギムナージウムの教師などとなった三月革命の「残党」たち）が、その理想とする政体は多様でありながらも「民族国家ドイツ」の象徴として祭り上げたシラー像が、彼らがドイツ語圏全体で組織した（1859年の）シラー祭の中でドイツ中に浸透してゆく。とくにトランシルヴァニアのドイツ人地域ズーベンピュルゲンでは、ギムナージウム³とその教授たちが提示する単一の国民詩人像のもと、あらゆる階層の人々が参加して本国ドイツと共にシラー祭を熱狂的に祝うことそのものが、彼らの単一の民族たる「ドイツ人」意識を不可逆的に高めていった。これを企図した教養市民層の武器は新聞を用いた呼びかけなのであった。

また、前稿では、ズーベンピュルゲンの新聞紙上で読者に呼びかける彼らの言葉の中には、後の国家社会主義者が語る言説と見まがうものが見えることを述べ、1905年のシラー没後100年祭では、すでに統一が成ったドイツの「ドイツ民族」との一体化を掲げながら、ハンガリー政府の抑圧に耐えて粛々と行われたシラー祭を描出した。しかしそれだけでは、これらのシラー祭とナチズムのシラー言説を結び付けることはできない。本稿はそれが結局は直結していくものであったことの概略を描くことを目的とする。

しかし、そのような考え方に与しない、独立したザクセン人としての生き方を希求する人々ももちろんあったのだが、その存在と主張については前稿では触れなかった。ドイツ帝国成立を経て戦間期に至るまで、後述のようにザクセン人の間でも汎ドイツ主義、それに抗する小ザクセン主義（後述する、孤立主義的な旧政体の信奉者の主張）的という主要な対立の構図の他、様々な

立場からの主張が乱立していたが、その根底にある「ドイツ国民」としてのアイデンティティーはすでに1859年のシラー生誕百年祭の折に、それを認めたくない旧世代の人々すなわち小ザクセン主義者を後目に、否が応でも確立されようとしていたのである。そしてかつて16世紀のザクセン人が、オスマン・トルコの支配下でカトリックの掣肘を受けずに、ルター派の新教を瞬く間に受容した時のように、「ドイツ国民」としての意識を確立したばかりの彼らは瞬く間に国家社会主義化する。本稿では、このシラー祭に関する理解をもとに、トランシルヴァニアのシラー祭からの視点でナチズムの時代までのドイツのシラー像の（表面的な）変容と一貫性を確認し、次稿でそれをザクセン人に逆照射して比較論的に描出するための準備までを行いたい。

国家社会主義者としてのシラー！

戦間期の国家社会主義ドイツ労働者党（NSDAP）が1933年、ワイマール憲法の下で「合法的に」独裁政権を手に入れた翌年、1934年には、ドイツ本国において最初にすでに1929年には国家社会主義化が開始された⁴ザクセン・テューリンゲンの主要大学であったイエーナ大学をはじめとする大学を中心に、松明行列を伴う盛大な生誕175年祭が催されていた⁵。イエーナ大学がNSDAPの州政府によってフリードリヒ・シラー大学⁶と改名されたのは、このシラー祭の頂点、生誕記念日の11月10日のことであった。150周年や200周年ではない175周年祭が盛大に祝われることには当然ながら大きな政治性があった。この年のシラー祭の基調は、露骨にナチズムとシラーを結びつけようとするものであり、ヒトラーはイエーナの隣、ゲーテとシラーの古典主義の聖地、彼のお気に入りのヴァイマルで開催されたシラー祭に、軍服を脱いでタキシード姿で列席し、悦に入っていた。ゲーテとシラーが手を携えて古典主義の理念を確立したとされてきた⁷ヴァイマル及びイエーナにおいて、世界市民ゲーテを除外してシラーのみをこの地に強引に結びつけることで、改めて国家社会主義の英雄としてシラーを祭り上げることに成功したからである。イエーナ大学はすでに、ドイツの各州の中で初めてテューリンゲンで与党となったNSDAPの手で着々と国家社会主義化の先陣を切っていた大学なのであった。

このシラー生誕175周年祭を2年後に控えた1932年に刊行された一書は、ナチズムによるシラー像の操作を端的に示すものであった。副題を「シラーの戯曲における国家社会主義」としたハンス・ファブリーチウスのこの書、『ヒトラーの戦友シラー』（Fabricius 1932）⁸が語る、何が何でもシラーは国家社会主義者であったという主張がそれである。

ハンス・ファブリーチウス（Hans Fabricius, 1891-1945）は中尉で従軍作家であったヨハン・ファブリーチウスの子としてベルリンに生まれ、第二次大戦末期の同地で戦死した。1913年バルト海に面した大学町グライフスヴァルトで法学博士の学位を得ている。第一次世界大戦中1915-18年、ロシア、セルビア、フランスで従軍し、1916年には二級鉄十字勲章をうけた。法律家。1933年から没するまでNSDAPの国会議員を務めている⁹。

ここで彼の当該の書及びその中に示された主張を紹介する。1932年というこの書の出版年は、1934年のシラー生誕祭が周到に国家社会主義的に彩られるための準備の一環としては実に好適であった。1934年の本書第2版の内扉の裏には、黒枠で囲んで「この書は、ドイツの国家社会主義がまだ嘲笑を受け、誹謗されていた1929-1931年の戦地間移動中に成立した」との記述がことさらに示してある。ヒトラーの政権奪取の前に国家社会主義的シラー祭を予感して書かれたものだとすれば、ファブリーチウスの先見の明には驚くべきものがあるといえよう。しかし、ナチズムの政権奪取までの道のりは精緻な戦略の積み重ねの歴史であり、本書が出版に至ったのもそ

の一環と見ざるをえない。

この書の構成をみると、「シラーと民族を墮落させるもの」と題した序言に続き、「社会主義と総統¹⁰の国家（『群盗』）」、「民族国家と総統の野心（『フィエスコ』）」、「民族と社会（『ルイーゼ・ミラリン』¹¹）」、「国家権力と市民の自由（『ドン・カルロス』）」、「兵士階層と政治（『ヴァレンシュタイン』）」、「恐怖政治と法（『マリア・スチュアート』）」、「信仰の力と民族の解放（『オルレアンの少女』）」、「奴隷制と支配者の悲劇（『メッシーナの花嫁』）」、「民族の危機と自由への意思（『ヴィルヘルム・テル』）」、「民族と支配者（『デメトリウス』）」と題した各章で、シラーの戯曲について述べ、いかにシラーが国家社会主義的であったかを諄々と（説得力に欠ける独自の考えにより）説明し、「シラーと国家社会主義」なる終章では確信を持って「国家社会主義者としてのシラー」を語る。シラー作品の分析にあてられた各章を紹介すべきところではあるが、あまりにも露骨な牽強付会によってシラーと、そもそも原理的に大きな矛盾を内包した国家社会主義とを結びつけているのは明白であるので、躊躇なく引用を省く。ファブリーチウスの確信は決して論理的に跡付け得るものではない。それはフマニテートの精神に対する完膚なき破壊行為以外の何物でもない。シラーが国家主義者であったか否かについて、本論で検証する意図はない。しかしこのシラー国家社会主義者説が主張されたのはナチスによる、その時代のみのものであったことは明らかである。本書終章の結びの部分のみを紹介しよう。この箇所だけでもファブリーチウスの主張は言い尽くされている。敢えてファブリーチウスのシラー作品論本文を引かない理由も理解していただけることと思う。ファブリーチウスは「我々ドイツ人にとって、シラーの戯曲作品は、人を震撼させる訴求性の化身である。」(S. 126)「彼は戦士であった…彼は戦い、そしておのれ自身に勝利した。彼は戦い、そして世界に勝利した。彼は戦い、そして民族を墮落させる輩に勝利した。彼が身罷った時、唯物論、合理主義、自由主義、エゴイズムなど敵の巨人どもは、彼らの後ろ暗い成果ともども、五体を引き裂かれて戦場に伏していた。」(S. 126 f.)と述べたうえで、以下のように彼の書を結ぶ。

国家社会主義者としてのシラー（鈴木注：字間を広げた強調は原文のまま）！我々は誇りを——そして感謝もって、かかる者としての彼に挨拶を送ってよいだろう。何故なら、彼がいなければ我々はそのも存在していたか、どのようなものになっていたか誰にも知り得ないからである。おそらく彼は他の誰よりも力強く、衰微の時代にあってもドイツ民族の理想の灯火を絶やさず保ち続けた人物であった。自分の舌でこの詩人を嘲っていた幾人かの者はしかし、自分の心の隠れた片隅にこの偉人の遺産を身につけていたのであり、ある日この遺産が露わになり、それを持つ人は自分の新しい生に目覚めたのである。数えきれない若者の魂に、ほかならぬシラーが後の再生の萌芽を植え付けたことは疑いない。民族を墮落させる輩のあらゆる嘲笑とあらゆる歪曲のわざは、シラーの精神が生贄を焼く炎に等しいもので、その精神がいつか改めて力強い閃光となって燃え上がるまでドイツ人の心に静かに赤く燃え続けていたことを覆い隠せなかった。

国家社会主義はシラーが創作の源としたのと同じ永遠の力の源泉から汲み取る。しかし作品の中で詩人は、目覚めつつあるドイツのために、さらに決して誤解の余地がない源泉を遺贈してくれた。この泉から我々は掬い、飲もうと欲する。この源泉から、我々は渴いた我が民族同胞に力を分けんと欲するのである。

我々の戦う隊列は弛むことなく行進を続ける。犠牲となって死んだ同志たちと、過去のド

イツの戦争による死者たちは「心の中で我々の隊列に加わって行進する」¹²。しかしその先頭には、輝くハーケンクロイツを掲げながら、生きた指導者¹³たちと肩を並べて、土に体を覆われた偉大な精霊たちが歩いていく。彼らに混じって、毅然と誇りをもってフリードリヒ・シラーの輝かしい姿が聳え立っているのである。戦士たちの模範となって、尻込みする者には拍車として、臆病者には義憤となって、しかし彼が死んだと信じる民族を墮落させる輩に対しては恐怖となって聳え立っているのだ。(ファブリーチウス 1932 S. 127 f.)

こうしてみると、ファブリーチウスは延々と独断的な作品論を展開した挙句、シラー自身のドイツに関する根本思想がいかなるものであるのか、国家社会主義的であるのか、ということを結局終章でも明確に纏めることには成功しなかった。主義とシラーを結合させることのみが彼の目的であり、それはシラーの作品如何によらず初めから決まっていたのである。ここに見られるのは、シラー崇拜が極まった果てのひとつの幻想と、それを描こうとする猛烈な勢いにすぎない。しかし本書がシラーについての NSDAP の公式見解そのものなのであり、全ての国民が、少なくとも表面上これを支持せざるを得なくなる¹⁴。

ワイマールのシラー祭において、その頂点となる生誕の日 11 月 10 日、臨席したヒトラーを前に、ゲッベルスは「シラーがこの時代に生きていれば、我々の革命の文学上の偉大な先駆者だっただろう。シラーは全身全霊革命に身をささげるにふさわしい性格であった上に、革命に創造的に形を与えるための芸術的天分を備えていた」(Ruppelt 1979 S. 154) と演説を始めた。これもファブリーチウスの手の内から一歩も外に出ていない。そしてシラーに関するナチスの最終目的は、ヒトラーを彼に重ねることなのであった。ゲートを排除したワイマールとイエーナの成立を祝うことこそがこのシラー祭の本質であったというべきである。このシラー祭はいかに奇矯なものにみえても、シラー祭の歴史の中の一つの頂点であったことは間違いない。

しかし、ファブリーチウスが筋金入りの NSDAP 党员であったとはいえ、またシラーが国民詩人として崇拜されてきたとはいえ、またナチズムをゾーベンビュルゲンのザクセン人たちがいち早く諸手を挙げて受け入れることになるとはいえ、それだけではシラーが国家社会主義者とされ、それが(強制的ではあれ)受容されるまでにはなお——1859 年のシラー祭における「民族」を象徴する「国民詩人」シラーの像からは——遠いものであり、ファブリーチウスの著作においてシラーが唐突に国家社会主義者とされたように見えるのは当然である。

最果ての「ドイツ」の 1859 年のシラー祭から遠望する NSDAP のシラー生誕 175 年祭

前節でみたのは、実に荒唐無稽と思われるほど国家社会主義、そしてヒトラーに重ね合わされたシラー像であった。しかし本節で描出を試みるのは、逆に、1905 年の没後 100 年祭を準備しようとする新聞が描いて見せた 1859 年のシラー祭における「ゾーベンビュルゲンのシラー像」とファブリーチウスの主張との、一見して遠く見える主張の類似性である。

試みに、上に引いたファブリーチウスの結びの文章の中の「国家社会主義者」を「我が民族」(の一員)などと、「国家社会主義」を「民族主義」などと置き換え、ハーケンクロイツといった国家社会主義固有の用語を取り去ってみよう。このようにして政党名とその主義を象徴するものを消してみると、それだけで、後に残ったものは、1859 年以降のシラー祭において、とくに 1859 年のシラー祭の、「この全ドイツ民族の、そして当地で暮らす大ドイツ民族自身の第二番目(鈴木注:の民族集団の)のうち、考え、そして主導する一部分に属する人々は、歩み出」よ、と呼

びかける昂揚した祝祭的言説¹⁵の中で繰り返されてきた「民族 (Nation)」国家ドイツの形成と強化の主張と何ら変わらないものであることを見ることのできるのではないだろうか。「シラーが創作の源としたのと同じ永遠の力の源泉から汲み取」ろうとしたのは、この意味では過去のシラー祭を主導した人々も同様なのだと言わざるを得なくなるのである。ただしファブリーチウスの「彼が身罷った時、唯物論、合理主義、自由主義、エゴイズムなど敵の巨人どもは、彼らの後ろ暗い成果ともども、五体を引き裂かれて戦場に伏していた」の部分は、実は彼のこの著作全体の内容の要約のようなものなのだが、時代錯誤も甚だしく、論評の対象とはしがたいのは明らかである。

すなわち、前項で見た、国家社会主義ドイツ労働者党が1934年に行った、シラー祭における国家社会主義者としてのシラーに対する意味付けと、1859年及び1905年のシラー祭の統一的基調とされた単一のドイツ「民族」(Nation)の象徴という意味付けの間には差があるように見えるのだが、それは前面に押し出された「国家社会主義」という言葉のためなのである。本質的には、一皮剥けばシラー祭の基調はこの時点、すなわちなチス主導の生誕175周年祭まで基本的に一貫して同じものとなる。ギュムナージウムの教授たちが主導したトランシルヴァニアのシラー祭は、それぞれ統一されつつあり、そして統一されたドイツと、このドイツとザクセン人との統一の象徴としてのシラー祭なのであったが、それと国家社会主義者ファブリーチウスの主張とは明らかに大きく重なる。

第一次大戦の敗戦後、統一された「民族」(Volk)への参加と「失地回復」は、アウスグライヒ以降のハンガリー化と第一次大戦以降のルーマニア化を通じて少数民族の一つに貶められていくという危機感を背負ったズィーベンビュルガー・ザクセンのもののみであるのではなく、大戦で失ったものの回復を求める全ドイツ「民族」(Volk)のあらゆる階層の人々が共有した望みであったと見ることに誤りはなかろう。ナチズムが汲み取ったのは「フォルク」のこのような願望であることは誰にも否定できない。シラー祭もそれを汲み取り、希望と熱意を増幅するための道具として機能し続けてきていたのである。しかし少なくとも最初の1859年のシラー生誕百年祭が標榜した「民族」(Nation)という言葉が含む内容は、もちろんシラー祭全体でも各地のシラー祭ごとにも統一されたものではなく、祝祭における論者ごとに一つの民族像があった¹⁶。最初の1859年のドイツのシラー祭と1934年のシラー祭の間に、それぞれ統一的な「成立するべき/(1871年に)した」ドイツの国家像がいかなるものであるかは問わず、なによりもまずドイツ民族への完全な一体化を果たす」という意味付けのみが明確に主張されていたズィーベンビュルゲンの1859年と1905年のシラー祭の状況を挟んで観察すると、実は1934年までのシラー祭は同じベクトルの上にあったことが容易に見えるのである。

シラーの作品を成立当時のコンテクストに照らして正しく理解し、共有することは教養ある層のみに可能であったのかもしれない。次節で、没後100年祭の2年後、ズィーベンビュルゲンで1907年に発行が開始された(1907-1914)教養層向けの雑誌『カルパーテン』を編集したアドルフ・メッシュェンデルファー(Adolf Meschendörfer)が、シラーの『人間の美的教育について』(*Über die ästhetische Erziehung des Menschen*, 1795)に基づいて、「美的教育」を標榜して「芸術が持つ普遍的価値の世界」にズィーベンビュルゲンの人々を誘おうとしたことに触れる。少数ながらシラーの作品および主張を具体的に生かそうというこのような動きがズィーベンビュルゲンにあったことは特筆に値しよう。しかしその影響は短期間で、限定的なものであり、間もなく後継雑誌によって国家社会主義受容のための雑誌へと主旨が変更されることになる。

シラーならぬシラー祭が鼓舞したのは、その古典主義的意図を理解した上でシラーの作品を暗唱し、心の糧としていた人々のみではない。彼ら以外の、シラーを国家社会主義者と認識する人や、シラーに無関心な人も含むあらゆる階層の人々なのであって、当然のことながら戦間期には、プロパガンダによってシラーが国家社会主義者であることを信じて疑わない人々も増える。後に見るように、彼らは、少なくとも第一次大戦後近代国家ルーマニアに置かれることとなったズィーベンピュルゲンにおいては、後述のように教養層に導かれた「選挙する家畜」と化してナチズムに盲従することになる。そこにみられるのは「民族」という個々の人間がそれぞれに持つ強力な概念共有の幻想が合わさって一つの方向性を持ってしまった状況なのである。

前稿で述べたように 1905 年のシラー祭に対して、教養市民層という、実は鶴のように総体を把握するのが難しい集団に指揮されたズィーベンピュルゲンの新聞は、1859 年のシラー祭で集めた募金を（まだ統一は成っていない）「ドイツ」の「シラー基金」に送った際の礼状の一文を本国から受け取っていたことをことさらに再掲載して見せる。曰く、「この献金はドイツの文化生活の最も遠い最終地点の一つから、すなわち純粋にゲルマン的な、ズィーベンピュルゲンのザクセン地方から到着したものであり、改めて、いにしへの祖国との精神的利害を伴う関係があらではいかに深いかにについての証明を与えてくれたものなのです。感謝を、心からの感謝をこのドイツ的行為に対して表します」（鈴木 2018 S. 34）。「純粋にゲルマン的」というナチスの用語にも聞こえる言葉を含む「純粋にゲルマン的な、ズィーベンピュルゲンのザクセン地方」という表現は、ザクセン人たちにとっては「ドイツ」からの、ともに帝国に参加せよという誘いにも思われたことであろう。前稿で描出したように、1859 年のシラー生誕 100 年祭を先導したのはギュムナージウムの教授たちであり、主たる行事もギュムナージウムを舞台に行われており、それはハンガリー化によってハンガリー国民として生きることを強いられた苦しみ耐えながら挙行された、自制的な色彩の濃い 1905 年の静かな没後 100 年祭においても同様であった。新聞はシラー祭を、ハンガリー国家の版図内にあつては極力内向的、抑制的な、他のドイツ語圏のシラー祭に比べればひっそりとした祝祭として呼びかけながら、同時にやはり「ドイツ民族」たるザクセン人のアイデンティティーの保持を明確に呼びかけていた。前稿で述べたように、ズィーベンピュルゲンには当時まだ大学がなかった。ギュムナージウムが当地の最高教育機関であり、卒業生は本国、特にプロイセンのザクセン地方を中心とする大学に向かい、教師や牧師となって戻ってくるのが通例であった。彼らがザクセン人全体を導く層となる。この重要な教育機関が、若い世代に「ドイツ人」としてのアイデンティティーを植え付けていたのである。そして彼らが戦間期のプロイセンで、ズィーベンピュルゲンのザクセン人たちが頼みの綱とした民族国家ドイツの国家社会主義をいち早く徹底的に受容することになる。

すなわち、ズィーベンピュルゲンにナチズムを迎え入れた人々は、シラー祭を主導した人々、すなわち「汎ドイツ主義者」¹⁷の直系とすることができる。もちろん、教養層の中には、牧師を中心に、かかる人々以外の、ザクセン人としてのアイデンティティーの保持を主張する人々も多数おり、この人々は「小ザクセン主義者」として彼らと拮抗することになる。前稿で描出した 1859 年と 1905 年のズィーベンピュルゲンのシラー祭を結ぶ線があるとすれば、その延長線上に国家社会主義者が描く Volk 像、及びそこに重ねられたシラーのイメージとが矛盾なく重なる。本稿の最後に、このズィーベンピュルゲンにナチズムを迎え入れた人々とそこに至るまでの状況を一瞥しておく。

小ザクセン主義・汎ドイツ主義・国家社会主義

1934年までのシラー祭の通時的一貫性を論じた前節に対し、本節ではトランシルヴァニアのシラー祭とザクセン人の政治的動きとの関係をやや詳しく論じることになる。ここではまず、ズィーベンビュルゲンでナチズムが受容される戦間期までの概略を示しておくこととしたい。

アンドレアス・メッケル（1994）によれば、1867年のアウスグライヒから1933年までのズィーベンビュルゲンの政治状況を概観すると、常に「小ザクセン（kleinsächsisch）主義」と「汎ドイツ（alldeutsch）主義」が主な対立軸であった。またその間に4世代に亘る交代があり、アウスグライヒ前後1867年以降の「老ザクセン人」（Altsachsen）勢力と「青年ザクセン人」（Jungsachsen）勢力、二重帝国内のハンガリー国家で自治権を失う1890年以降は「新聞」に従順な黒派（die Schwarzen）と急進的な緑派（die Grünen）、第一次大戦を前には、小ドイツ主義に類した独立的ドイツ系民族に自らのアイデンティティーを求める小ザクセン主義者とハンガリー内に都市を築いていてもあくまでドイツ人であることにアイデンティティーを求める汎ドイツ主義者、トランシルヴァニアがルーマニアの版図に入った1918年以降の保守主義者（die Konservativen）と革新主義者（die Erneuerer）とその都度名を変え、対立の要点も時勢に応じてそれぞれ変えてはきたのだが、「老ザクセン人」と「青年ザクセン人」が小ザクセン主義内の内輪もめの様相を呈していた程度であったのに対し、第一次大戦後に改革主義者たちが優勢になるとザクセン人固有のアイデンティティーは失われ、かわりに彼らが「ドイツ人」となっていくことになったと主張している。（以上 Möckel 1994）

「小ザクセン主義」とは、中世にハンガリー王から自治の特権を認められて以来、1890年に「ハンガリー人」としての身分以外の権利を完全に失うまで保持していた地位、ドイツからは遠く離れた地域にあっても、あたかも細分化されていた神聖ローマ帝国内の一領邦国家の一つに類されるかのような自律的地位、広い意味ではドイツ人としての意識はあるが、ズィーベンビュルゲン一国の国民としての地位に固執する考え方である。それに対して「汎ドイツ主義」は「ドイツ帝国」成立とその後の進展を見据えて、大きなドイツ人国家の一員であることにアイデンティティーを見出す考え方である。これらの対立は、どこまでを同胞とみるかによるものであり、本質的に小ドイツ主義と大ドイツ主義の対立に似てないこともない。メッケルが主張するのは、ドイツ国民としてのアイデンティティーの確立までにザクセン人たちがたどった内部的な政治抗争¹⁸の歴史である。

ギュムナージウムの教員が公式に先導した1859年と1905年のシラー祭の影響を考察するために、メッケルが挙げる興味深い事実に触れる¹⁹。「老ザクセン人」派が（自治権を持った）法的地位を防衛しようとしたのに対し、「青年ザクセン人」派は政治的に討議した上での解決を求めた。後者はたとえば、トランシルヴァニアのザクセン地域（ズィーベンビュルゲン）をハンガリー内のザクセン人の地方自治体とすることを求めている。1871年に新たにナツィオーンス・ウニヴェルジテート²⁰で行政改革についての聴聞が行われた。「老ザクセン人」派は21名、「青年ザクセン人」派は18名、ルーマニア人は5名の代表を出したが、ルーマニア代表と連合した「青年ザクセン人」が優位に立ち、改革を実行したというのである（Möckel 1994 S.130 f.）。

メッケルが主張するように、最終的に汎ドイツ主義が勝利する過程の発端に「老ザクセン人」と「青年ザクセン人」の対立があったとすれば、ザクセン人地域をハンガリーの地方自治体の一つに変えようという「若いドイツ人」による行政改革は、一見すると「民族」の保持の観点からは一歩後退したもののようにも映る。しかも、この時点で守旧派の「老ザクセン人」が議会でや

や優勢を占めていたことも興味深い。しかし「青年ザクセン人」らは自らの背後にすでに「ドイツ民族」、そしてこの年に成立した「ドイツ本国」（プロイセンのドイツ帝国）の二つを背負っているものなのであり、1871年の事態はメッケルが言うような小ザクセン主義内の内輪もめなどではないと思われる。ザクセン人だけでは如何ともしがたい、1867年のアウスグライヒによる民族国家ハンガリーの成立という事態の中で、「老ザクセン人」が求めるような自治権を持った少数民族としての、すなわち国家の中の国家のような存在様式はもはやあり得ない。「他国」の中の少数民族となっても、folkとしての「ドイツ人」、「民族国家ドイツ」の一員として生きることをはじめて議決したのがこの1871年の決定とみるべきなのである。

この行政改革を主導した「青年ザクセン人」派はもちろん、シラー祭を主導した教授陣に育てられたギュムナジウムの卒業生である。『ズィーベンビュルゲン新聞』の編集者 G. リントナーや F. シュライバーに率いられた、1859年当時生徒であった彼らは、ドイツの大学を卒業して故郷に戻り、すでにドイツ人の一員としての意識をもって、当地がドイツ国家の一員となるべく政治の改革に取り組み始めたのである。当時のズィーベンビュルゲンの社会は、牧師の子は牧師、教師の子は教師や学者を連綿と続け、この二つが指導的な層となる、ある種の身分社会であった。これらの教養人とされる人々が社会をリードしていたのであって、1859年のシラー祭を祝った若い彼らが結束してドイツへの参加を目指せば、ズィーベンビュルゲンは実際にそのように動く²¹。メッケルは以下のフリードリヒ・トイチュの言葉を引いている。

全ドイツ人のまとまりとしての民族 (Volk) としてのザクセン人の代表者たちは、他民族の代表者たちの票と合わせて多数派を構成することで、ナツィオンス・ユニヴェルジテートにおいて残りの人種としての民族 (Nation)²²のザクセン人の代表者たちを打ちのめし、ザクセン民族 (Nation) の名において決議を行った。これによりザクセン民族 (Nation) を亡き者にしたのである²³。

これ以降、ハンガリーの版図の中で、着々とザクセン人のドイツ化が具体的に進行してゆく。前項で描出した1905年のシラー祭はその一つの頂点なのであった。その余韻が残る1907年、前節で述べた『カルパーテン』(Karpathen, カルパチア山脈の意)と題された文芸・文化誌が刊行される。この雑誌は、以後現在に至るまでのズィーベンビュルゲンの文化に絶大な役割を果たし続けている文化雑誌の嚆矢となるもので、第一次世界大戦がはじまる1914年まで刊行が続けられた。これが「シラー色」を帯びていたことは非常に興味深い。ズィーベンビュルゲンの主要文芸・文化誌²⁴には、『カルパーテン』の後、第一次大戦後、ズィーベンビュルゲンがハンガリーから一転してルーマニアに編入された激動の時代の中で次第にナチズム導入に傾いていった『クリングゾール』²⁵(Klingsor, 1924-39)、ナチス時代の政策宣伝誌と化した『folk・イム・オステン』(Volk im Osten, 1940-44)、戦後のザクセン人のオピニオンリーダーであり、ミュンヘンで刊行された『南東ドイツ四季報』(Südostdeutsche Vierteljahresblätter, 1952-2005)、それが学術誌の傾向を強めた『シュピーゲルンゲン』(Spiegelungen, 2006-)があるが、内容・スタイルともに、『カルパーテン』がこれらの後の雑誌に与えた影響は多大であった。『カルパーテン』以降の上記の文化雑誌が「小ザクセン主義」的であったことは一度もない。ドイツと、トランシルヴァニア以外の文化世界に教養層の目を向けさせてきたのは、これらの雑誌であった。

『カルパーテン』についてザクセン人の歴史家ヴァルター・ミュスは、チャウシェスクの時代

に興味深い指摘をしていた。その主旨をここに要約してみる。

メッシェンデルファーは、郷土の人々への「美的教育」を目指し、郷土史家や牧師、ギュムナージウムの教員らの文芸作品を紹介するのみならず、広くドイツ語圏及び西欧の文芸の潮流を紹介し、さらにはバナートやブコヴィーナなど、トランシルヴァニアに隣接する他地域のドイツ人の文芸、ハンガリーとルーマニアの文学の紹介も行っていた。彼は「我々の雑誌がなすべきことは第一に、狭くかつ広い我々の郷土に対する愛を涵養し、我々の民族同胞 (Volksgenosse)²⁶ の芸術と生活におけるより高度の精神的水準の醸成に寄与すること」²⁷ であり、「我々ザクセン人を現在の他国 (鈴木注：この時点ではハンガリー) からも祖国の他の人々からも隔離しようとする連中が打ち立てた万里の長城がどこに通じているのか、我々現代の若者は余りにも頻繁に感知しており、これに抗するべく雑誌を創刊した」。それがカルパチア山脈の山塊に登るに等しい難事であるので誌名を『カルパーテン』(カルパチア山脈) としたのだという。これに対して、教会側から、その首長であるザクセン管区監督ミュラー²⁸ が、1909年の管区教会会議において「我々の思考や感性の世界に奇矯なある傾向が生じてきた。これが外界からこの地に感染し、我々にとっては限りなく深刻な危険を孕むようになってきた。すなわち、芸術的唯美的教育のことである」と述べた (Myss 1968 S. 18-19, u. S.143) とのこと。

この「美的教育」は、シラーを愛するこの地域の文化世界にあっては誰も知らない者はいないので、それと明示されてはいないが、明らかにシラーが『人間の美的教育について』 (*Über die ästhetische Erziehung des Menschen*, 1795) において目指したものを受けている。シラーの論文における主張が (その成否は別としても) 標榜され、実行に移されようとしたのは、ズィーベンビュルゲンでは初めての試みであった。このようなアプローチに比べれば、ファブリーチウスのシラー理解がいかに奇矯なものであるかが際立つ。この雑誌のようなものを心待ちにしていた教養層も、シラー祭を先頭に立って祝った人の中に多数いたであろう。

問題は、小ザクセン主義者がこの雑誌をどのように攻撃したかである。明らかに小ザクセン主義的なミュラーの主張はしかし、「芸術的唯美的教育」という言葉を用いることで、シラー理解の浅さを示していることだけは指摘できよう。それが「外界からこの地に感染」したというのは、あたかもこの地にシラー祭がなかったかのような時代錯誤にすらみえる。20世紀初頭においてなお、これで教区民を指導しようとする試みが可能であったのであるから、背景になお、保守的な小ザクセン主義に盲従する人の広がりがある程度の大きさがあつたことを感じないわけにはいかない。それと同時に、シラー祭が全ドイツ人に一つの民族としての統一を呼びかけたように、シラーを語ることそのものが同じ文脈の中で理解されていたことも推察できる。

ただしもちろん、教会の管区監督がその立場を取ったからと言って、牧師がすべからず小ザクセン主義を固守していたわけではない。1859年のシラー祭の幕がトランシルヴァニアでは教会の鐘の音で切って落とされたことも事実なのである。ミュラーの攻撃は、ザクセン人が「ドイツ民族」となることに抗する実質的には古来の純然たる小ザクセン主義による最後の大きな反撃だったというべきかもしれない。

ズィーベンビュルゲンのナチスの文化雑誌に関する小論ですでに述べたように、戦間期ズィーベンビュルゲンのナチ化を主導したのはツィリッヒとその雑誌『クリングゾール』であった (鈴木 2014 S.47f.)。『クリングゾール』に関する『八百年後の総決算』 (Myss 1968) の著者、前述のミュスは、この雑誌と、これに先行する『カルパーテン』を比較し、後者の編集者アドルフ・メッシェンデルファー (Adolf Meschendörfer, 1877-1963) をアンダーステートメントの人と呼び、前

者の編集者ハインリッヒ・ツイリッヒ (Heinrich Zillich, 1898-1988) をパトスの人と呼んだ (Myss 1968 S.24)。そしてハンガリー時代のズィーベンビュルゲンの『カルパーテン』と同じく、ルーマニア時代の『クリングゾール』から様々なテーマに関するこの二人の見解を並べて提示し、それらはみな、『カルパーテン』と『クリングゾール』が互いに無関係ではなく、同じ胴体から出た肢節であることを証明しようとした。かくしてツイリッヒは「メッシェンデルファーの肩の上に立ち、『クリングゾール』は『カルパーテン』の編集者がすでに思い描いていたもの、即ちズィーベンビュルガー・ザクセンの土地において精神面の革新のための拡声器になろうとする目論見を、継続していったのである」(ibid. S.31) とした。

この穏健に過ぎる表現・見解に真っ向から対抗するかのようになり、J. ベームは簡潔に「ルーマニア・ドイツ人のファシズムの先導者であり、先駆的思想家であったのはハインリッヒ・ツイリッヒである。彼の小説・詩・論説・記事、そしてインタビューは、すでにナチスがドイツで権力を握るよりも前から「民族的 (鈴木注: *völkisch*、フォルク的)²⁹」な世界観を用意していた。ナチスの民族という妄想と、異文化への過度の危惧を組織的に煽動することは 1933 年から国策となったのだが、ツイリッヒの詩の中ではすでに 1929 年にテーマとして道具立てになっていた」(Böhm S.60) と指摘している。これはロートが「すでに 20 年代の終わりにはフリッツ・ファブリーティウス³⁰ の自助運動が政治的な性格を帯びていたのにも拘らず、国家社会主義の方に方向性が決定されることは 1930/31 年になってからようやく確認できることになる」(Roth 1995 S. 107) と述べていることとも呼応しており、ズィーベンビュルゲンにおいて比較的早くから、国家社会主義という名がズィーベンビュルゲンを覆う以前に、広範な広がりを持っていたことと同じ事態を別の面からみたものに等しい。

ハインリッヒ・ツイリッヒの『クリングゾール』は、初めはメッシェンデルファーの文化雑誌の後継誌の装いで、ブコヴィーナのすぐれたユダヤ系詩人の作品を紹介するなどもしていた。15 年の刊行期間があったが、1933 年以降の 6 年以上に亘っては「血と土地の神話」を語る雑誌となる。最後の一年間、ツイリッヒはすでにドイツに渡っており、編集から手を引いた。しかし上に引いたベームの言葉の通り、この『クリングゾール』に拠る、クリングゾール一派 (Klingsor-Kreis) と呼ばれる人々が、ズィーベンビュルゲンの国家社会主義化を最も徹底的に進めた旗振り役であった。ロートが「民族綱領 (Volksprogramm)³¹ との関連において、1932/33 年に公開の場で初めてズィーベンビュルガー・ザクセンの間にある政治的問題が議論されたのだが、その際に指導的な思想は大抵クリングゾール一派、すなわち若い知識人たちから来るもので、この国家社会主義者たちによって、結局は保守派たちも折れるほどに口説き落とされてしまったのである」(Roth 1995 S.110) と述べるほどの勢いであった。このとき、クリングゾール一派の連中は、選挙に参加している一般の人々を(意のままになる)「選挙機械」(Wahlmaschine) や「選挙する家畜」(Wahlvieh) と呼んで蔑んでさえいた由 (Roth 1995 S.106)。かくしてズィーベンビュルゲン思想界のみならず広範な人々の国家社会主義化は完了する。

ナチスがルーマニアのドイツ人の指導者に据えたアンドレアス・シュミットの『フォルク・イム・オステン』は戦時下の文芸・文化雑誌だが、シラーに言及されることは多くはない。メッシェンデルファーの精神を継いだはずのツイリッヒの『クリングゾール』におけるシラー観とシラー論の変遷、そして『フォルク・イム・オステン』におけるシラーの扱い、そして両者におけるシラー祭の描かれ方を探ることは、『カルパーテンの』後継において以下にシラーが国家社会主義

化されるのか、そしてナチ化したシラー観の成立過程を検討する上で、本研究においても重要な意味があるが、やや複雑な一つの大きなテーマをなすものであるため、これを次稿に送る。

次稿では、本稿の考察をもとに、ズィーベンビュルゲンの様相の描出に対象を絞り、低調であった1909年の生誕150年祭と、ツイリッヒの影が差す1934年の没後175年祭、及び社会主義時代の1956年の没後150年祭、1959年のシラー生誕200年祭を考察し、前稿および本稿との三部構成で、シラー祭を通じて現在まで彼らが保持している、シラーこそ最高の文学者であるというザクセン人の意識の根源を探る考察をいったん結ぶこととしたい。

文 献

- Böhm, Johann (1999) *Die Deutschen in Rumänien und das Dritte Reich 1933-1940*. Peter Lang Europäischer Verlag der Wissenschaften, Frankfurt a.M.
- Böhm, Johann (2006) *Hitlers Vasallen der Deutschen Volksgruppe in Rumänien vor und nach 1945*. Europäischer Verlag der Wissenschaften. Frankfurt a. M.
- Fabricius, Hans (1932) *Schiller als Kampfgenosse Hitlers. Nationalsozialismus in Schillers Dramen*. Verlag Deutsche Kultur-Wacht, Berlin/Schöneberg.
- Göllner, Carl (1988) *Die Siebenbürger Sachsen in den Jahren 1848-1918*. Böhlau. Köln/Wien.
- Friedrich Schiller Universität (2009) *Tradition, Brüche, Wandlungen: Die Universität Jena 1850-1995*. Böhlau, Weimar.
- König, Walter. Hrsg. (1994) *Siebenbürgen zwischen den beiden Weltkriegen*. Böhlau, Köln.
- Lilla, Joachim u.a. (Bearbeitung. 2004): *Statisten in Uniform. Die Mitglieder des Reichstags 1933-1945. Ein biographisches Handbuch*. Düsseldorf.
- Logge, Thorsten (2014) *Zur Medialen Konstruktion Des Nationalen: Die Schillerfeiern 1859 in Europa Und Nordamerika*. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen.
- Möckel, Andreas (1994) Kleinsächsisch oder Alldeutsch? Zum Selbstverständnis der Siebenbürger Sachsen von 1867 bis 1933. (in König Hrsg. 1994 S.129-148).
- Myss, Walter (1968) *Fazit nach achthundert Jahren. Geistesleben der Siebenbürger Sachsen im Spiegel der Zeitschrift „Klingsor“ (1924-1938)*. Verlag des Südostdeutschen Kulturwerkes, München.
- Myß, Walter (Hrsg.1993) *Lexikon der Siebenbürger Sachsen*. Wort und Welt Verlag, Innsbruck.
- Roth, Harald (Hrsg.1995) *Minderheit und Nationalstaat*. Böhlau, Köln.
- Roth, Harald (1995) Zum Wandel der politischen Strukturen bei den Siebenbürger Sachsen 1918-1933 (in Roth Hrsg.1995 S.99-114).
- Ruppelt, Georg (1979) *Schiller im nationalsozialistischen Deutschland. Der Versuch einer Gleichschaltung*. Metzler Studienausgabe, Stuttgart.
- Stockhorst, Erich (1967) *Fünftausend Köpfe: Wer war was im Dritten Reich*. Blick & Bild Verlag, Velbert.
- 杉浦忠夫 (2005) 「シラー崇拜とナチズムとイエーナ大学 1933/34」『明治大学教養論集』 通巻 395 号 pp.7-29
- 鈴木道男 (2018) 「トランシルヴァニアのシラー祭—1859年の生誕百年祭・1905年の没後100年祭を中心に—」東北大学大学院国際文化研究科『国際文化研究科論集』第26号 29-42 頁
- 鈴木道男 (2014) 「アンドレアス・シュミットの『フォルク・イム・オステン』序説:忘れられた戦時下ズィーベンビュルゲンのナチス文化雑誌と文学」東北大学大学院国際文化研究科『国際文化研究科論集』第22号 45-58 頁
- 鈴木道男 (2007) 「ディアスポラの紐帯としてのアンソロジー—『故郷の心』とズィーベンビュルゲンの国家社会主義について—」『東北ドイツ文学研究』(50) 121-142 頁
- 鈴木道男 (1997) 「ルーマニアのドイツ言語語島の文化的意味について I. 三つの言語島の過去と現在」東北大学言語文化部『言語と文化』第8号 125-144 頁

注

- 1 本稿においても、多民族が居住するトランシルヴァニアの全体に関する場合トランシルヴァニアの名を用い、その中に多数の都市を構築して住まうドイツ人の世界を、トランシルヴァニアのドイツ名であるズィーベンビュルゲンと呼び、そしてそこに暮らすドイツ人をズィーベンビュルガー・ザクセンあるいは単にザクセン人と呼ぶ。彼らは出自からしてもドイツ本国のザクセン人とは異なるものの、自らを本国のザクセン人の子孫と考えていたことに注意されたい。
- 2 本稿においても、単に「新聞」と呼ぶ場合は、他紙であることを明示する場合以外はズィーベンビュルゲンの主要紙であった *Siebenbürgisch-Deutsches Tageblatt* 『ズィーベンビュルゲン＝ドイツ日刊新聞』を指す。
- 3 彼らが念頭に置いていた「ドイツ国家」の政体がいかなるものであるべきかについて、少なくとも新聞紙上で大きく問われることはなかった。ロッゲは「祝祭を支持する人々の間でも、祝祭の民族的性格の解釈には著しい相違があった。民族概念の曖昧さだけでなく、普遍的に説明可能なはずのフリードリヒ・シラーそのものすら、各々の祝祭会場に対して、民族的なもの、詩人とその作品に対する独自のディスコースを論じることを可能にしていた。それどころか、一部では、ただ一つの町の異なる集会場の聴衆に、異なる民族像を話すことすら可能であった」(Logge 2014 S. 393) としているが、シラーおよび民族、ひいてはドイツの国家像についての解釈が多様性を持つことは、当地では前提条件に対する認識が共有されているためか、回避されているように見える。
- 4 1929年、内務・教育相 W. フリックが「人種学」の H. ギュンターの招聘を画策し、翌年にはすでに実現している。
- 5 本稿のイエーナ大学およびワイマールのシラー祭に関する概説はこの大学の大学史 *Friedrich Schiller Universität* (2009) によるところが大きい。ただし煩雑を避けるため一文ずつの参照箇所の表示は省略する。
- 6 現在もこの大学の正式名称は *Friedrich-Schiller-Universität Jena* であるが、1558年の設立当初 *Salana* や *Collegium Jenense* と呼ばれて以来、名称はたびたび変更された。20世紀以降も、正式名称は1918年にザクセン総合大学 (*Sächsische Gesamtuniversität*)、21年にテューリンゲン州立大学 (*Thüringische Landesuniversität*) と改称されていた。
- 7 筆者は手放して単純にこう述べることには忤怩たるものがあるが、本論ではとりあえずこのように述べておかざるを得ない。
- 8 本稿における引用は1934年のシラー祭の年に出た改訂第2版による。
- 9 ファブリーチウスの略歴はシュトックホルスト (Stockhorst 1967 S.128) 及びリッラ (Lilla 2004 S. 131) による。
- 10 ヒトラーは1921年に国家社会主義ドイツ労働者党の総統 (Führer) となり、首相となった1933年以来、国の指導者として総統と呼ばれることとなった。
- 11 『たくみと恋』成立の際、最初にシラーがつけたタイトル。
- 12 1930年に戦死したホルスト・ヴェッセル (Horst Wessel) の有名な「高く旗を掲げよ—国家社会主義者の歌」の一節。現在のドイツ・オーストリアではなお禁止されているこの歌は、国家社会主義ドイツ労働者党の党歌であり、第二の国家ともいわれていた。
- 13 この語も Führer であるが、複数形であるので、ナチスの指導者原理の意味から「指導者たち」とした。
- 14 ナチスによる思想統制におけるシラーの位置づけについては、やや古いがルッペルトの研究 (Ruppelt 1979) が詳しい。この書は資料集としても優秀である。
- 15 詳しくは前稿鈴木 (2018 S.34) 参照。
- 16 Rogge 2014 S. 343 参照。前述のように、さらには成立すべき想定国家像も多様であった。
- 17 但し、もちろんドイツ各地のシラー祭において「大ドイツ主義」と「小ドイツ主義」のいずれが念頭に置かれていたかを明示することはできない。自らの出自を本国のザクセンとするズィーベンビュルガー・ザクセン人においては、おそらくは本国のプロイセン主導の小ドイツ主義を前提とする人がほとんどであっただろう。
- 18 とはいえ、後述のロートによれば、ザクセン人たちの政体は民主的な投票によるものではなく、主導的な教養層の互選で選ばれた人々が、無記名投票などではない声による投票で議決する古くからの形式を保持していた (Roth 1995 S. 101)。
- 19 ザクセン人の1918年、すなわちルーマニア化までの政体の変遷について頻繁に引用されるのはゲルナーの『1848年から1918年までのズィーベンビュルガー・ザクセン人』(Göllner 1988) だが、それを踏まえつつ、ここでは簡潔なメッケルの記述を用いる。
- 20 *Nationsuniversität*。実質的な国会であったトランシルヴァニア主要3民族の議会の使用言語はラテン語であっ

たことから、ラテン語名 *Universitas Saxonum* もよく用いられた。日本語の定訳はないが、意味上は *Gesamtheit der Sachsen*、すなわち「人種としてのザクセン人民族としての総体」をあらわす。ここでは、ドイツという言葉が使われてはおらず、あくまでもザクセン人であることに注意されたい。ユニヴェルジテートはもちろん総合大学の意味ではない。その実体は 1486 年に時のハンガリー王に認可されて以来、解体される 1876 年まで、(必ずしも民主主義的ではないが) 選挙によって選出された、ズィーベンビュルゲンのザクセン人内部の最高自治行政・司法機関であった。その内実は時代によってかなり変化を見せている。近代になると、ザクセン人地域のルーマニア人にも門戸が開かれていた。詳しくは、ミュスの事典 (Myß 1993 S. 364 f.) の記述が最も簡潔にして要を得ている。なお、文献表の Myss と Myß は同一人物である。

- 21 そうであるからこそ、1958 年のシラー祭を前に、オーストリア帝国法学院の院長ミュラー博士は「当地のドイツ世界のすべての教養階級の代表者たちは、感激をもって自らを祝祭的に表現しなくてはならない」と、対象を絞って呼び掛けていたのである (鈴木 2018 S. 33)。ロートも「まずもって確認しておくべきは、ザクセン人の歴史において西欧の近代的な理解による「民主主義」は存在しないこと」(Roth 1995 S. 108) だと強調している。
- 22 Volk と Nation の概念は、時代により、また用いる人により実に著しく異なっている。ここでは著者の意を汲んでこのように訳した。
- 23 Friedrich Teutsch: *Geschichte der Siebenbürger Sachsen für das sächsische Volk*. 4. Band, 1868-1919. Unter dem Dualismus. Hermannstadt 1926, S. 21
- 24 詳しくは鈴木 (2014) 参照。
- 25 この雑誌名について、筆者 (鈴木) はノヴァーリスの『青い花』の登場人物としてのクリングゾールのみを念頭に置いていた。しかしグリム兄弟が収録した『ドイツ伝説集』(*Deutsche Sagen*, 1816-1818) Nr. 561、「ヴァルトブルクの歌合戦 (Waldburger Krieg)」では、宮中での命を賭した歌合戦に策略で破れたハインリヒ・フォン・オフターディンゲンが、歌の師匠クリングゾールの仲裁を求めてハンガリーとズィーベンビュルゲンに赴き、これに応じて「ズィーベンビュルゲンの」歌匠クリングゾールが歌合戦の仲裁に乗り出す。悪魔をすら操るクリングゾールは明確にズィーベンビュルゲンの人物とされているのである。そしてこの雑誌は中世の大マイスタージンガーの名を載っていたことになる。グリム兄弟が引いた Johann Rothe の *Chronik von Thüringen* にある 1206 年という伝説の年号からするとクリングゾールはハンガリーに招かれたかなり早い世代に属することになる。ドイツ人の入植は 12 世紀 (1147 年説が有力である) に始まったばかりであった (鈴木 1997 の年表参照)。ドイツの騎士団も異民族対策として招かれてこの地へ入ったが、それは 1211-25 年のことである。伝説に正確さを求めるのはもちろん詮のないことであるが、ドイツ本国のザクセンのヴァルトブルクと、本来出自はザクセンではないズィーベンビュルガー・ザクセン人が住まうズィーベンビュルゲンを往来する人物たちの話が本国のザクセンに伝説として語られていたことは興味深い。なお、ワーグナーの『タンホイザー』も、タンホイザー伝説と共にこの伝説を下敷きになっているが、作中にクリングゾールは登場しない。魔法使いとして彼が登場するのはむしろ『パルジファル』の作中である。
- 26 もちろんこの時点での Volk に国家社会主義的な色合いはない。
- 27 これは重要な宣言だが、ミュスが引用したとする『カルパーテン』の箇所にも、残念ながら当該の記述は見当たらない。おそらく誌面以外の箇所でもツェンデルファーが述べたことと混同したミスなのだろう。
- 28 ミュスの辞典によれば Friedrich Müller (1828-1915) は牧師であり、歴史家・伝説研究者・牧師、管区監督でもあった。ライプツィヒとベルリンで学んでいる (Myß Hrsg. 1993 S. 349)。この人物のこの高齢になってからの発言は、小ザクセン主義的色彩をもったものである。しかし彼の発言に反して、彼自身も大学で「美的教育」の薫陶を十分に受けたはずである。この観点からは、教区民を郷土の狭い精神世界に押し込めようという狭隘な暴君の姿にしか見えないのは当然であり、明らかに小ザクセン主義の限界を示すものでもある。
- 29 もちろんこの時点での Volk は国家社会主義的な意味を持つものである。
- 30 この人物 (Fritz Fabritius) は先に論じたハンス・ファブリーチウスに似た姓だが、全く縁がない、ズィーベンビュルゲンの改革主義者と呼ばれる右翼運動家を率いた人物である。経済的「自助」が彼らの合言葉であり、小ザクセン主義の末裔のような位置にあった。
- 31 1933 年の最後のザクセン議会において決定された国家社会主義的方向の民族綱領。